平城京左京四条三坊十三坪

平成19年度発掘調査報告書

2009

（財）元興寺文化財研究所

序

現在、奈良は2010年開催予定の平城遷都1300年祭で盛り上がっています。そのような意味でも、奈良の寺院や平城京は、全国的に改めて注目されています。

今回、調査いたしました奈良市三条桧町の一角は、奈良時代の平城京四条三坊十三坪に相当する場所です。近年、発掘調査によってこの辺りが奈良時代にどのような開発が行われて、どのような景観であったかがわかってきています。

今回の調査でも、弥生時代の方形周溝墓が、平城京造営の際に壊されていたことが判明しました。こうした遺構の存在は、奈良の土地が、平城京が遷都してくる前にどのような状況であったかを知る手がかりとなるでしょう。遷都前後の奈良の変貌を、想像してみることも大切であり、楽しいのではないでしょうか。

平成21年3月

（財）元興寺文化財研究所
理事長　辻 村 泰 善

例　言

1．本書は、平城京左京四条三坊十三坪における発掘調査成果をまとめたものである。
2．調査地は、奈良市三条桧町400の一部、401-1の一部、402-1の一部で、開発対象面積は2204.84㎡、建築平面積は1024.34㎡、発掘調査面積は約475㎡である。
3．調査は、奈良県教育委員会及び奈良市教育委員会から依頼を受けた㈶元興寺文化財研究所が、平成20年２月12日～３月６日まで現地での作業を実施し、狭川真一・岡本広義・角南聡一郎が担当した。整理及び報告書作成は、調査終了後速やかに開始し、平成20年度をそれに充てた。
4．調査地での実測および写真撮影は、狭川・岡本・角南・坂本亮太がおこない、武田浩子（人文考古学研究室）・小幡千晶（奈良教育大学）・榊真麻（奈良大学）の協力を得た。出土遺物の実測及び浄書は、仲井光代（人文考古学研究室）がおこない、写真撮影は狭川が担当した。調査地の基準点測量は、世界測地系2000を利用した。
5．出土した木製品（柱）の樹種同定は木沢直子（木器保存研究室）が担当した。
6．本書の執筆は、第３章を木沢が担当したほかは、角南が担当し狭川が加筆した。編集は村田裕介の協力を得て角南が担当した。

目　次

第１章　はじめに
（１）調査に至る経緯 …… 1
（２）調査体制 …… 3
（３）周辺の調査 …… 3

第２章　調査の成果
（１）層序 …… 4
（２）遺構 …… 4
（３）出土遺物 …… 11

第３章　平城京左京四条三坊十三坪出土木製品の樹種同定 …… 16

第４章　総　括 …… 18

第１章　はじめに

（1）調査に至る経緯

平成19年10月、北側吉彦氏ほかから、奈良県教育委員会教育長あてに共同住宅建設に係る、発掘調査の届出が提出された。当該地は、平城京の条坊復元で、左京四条三坊十三坪にあたることから、発掘調査の必要があると判断された（Fig.1）。

同年11月、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会、㈶元興寺文化財研究所が協議を行った結果、当研究所が受託をすることでまとまり、当研究所と原因者である北側吉彦氏との間で契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

なお、調査に関する費用は原因者が負担した。同時に重機等機器類や現地作業員の手配についても、原因者が行った。

調査は、平成20年２月12日から開始し、３月６日に埋め戻しを完了し終了した。調査終了後、遺物整理・報告書作成に関して、別途原因者と当研究所が契約を締結し、速やかに開始した。

発掘調査及び遺物整理・報告書作成については、北側吉彦氏の全面的な支援や協力があり、無事に終了することができた。また、奈良県教育委員会及び奈良市教育委員会から適切な指導を賜った。

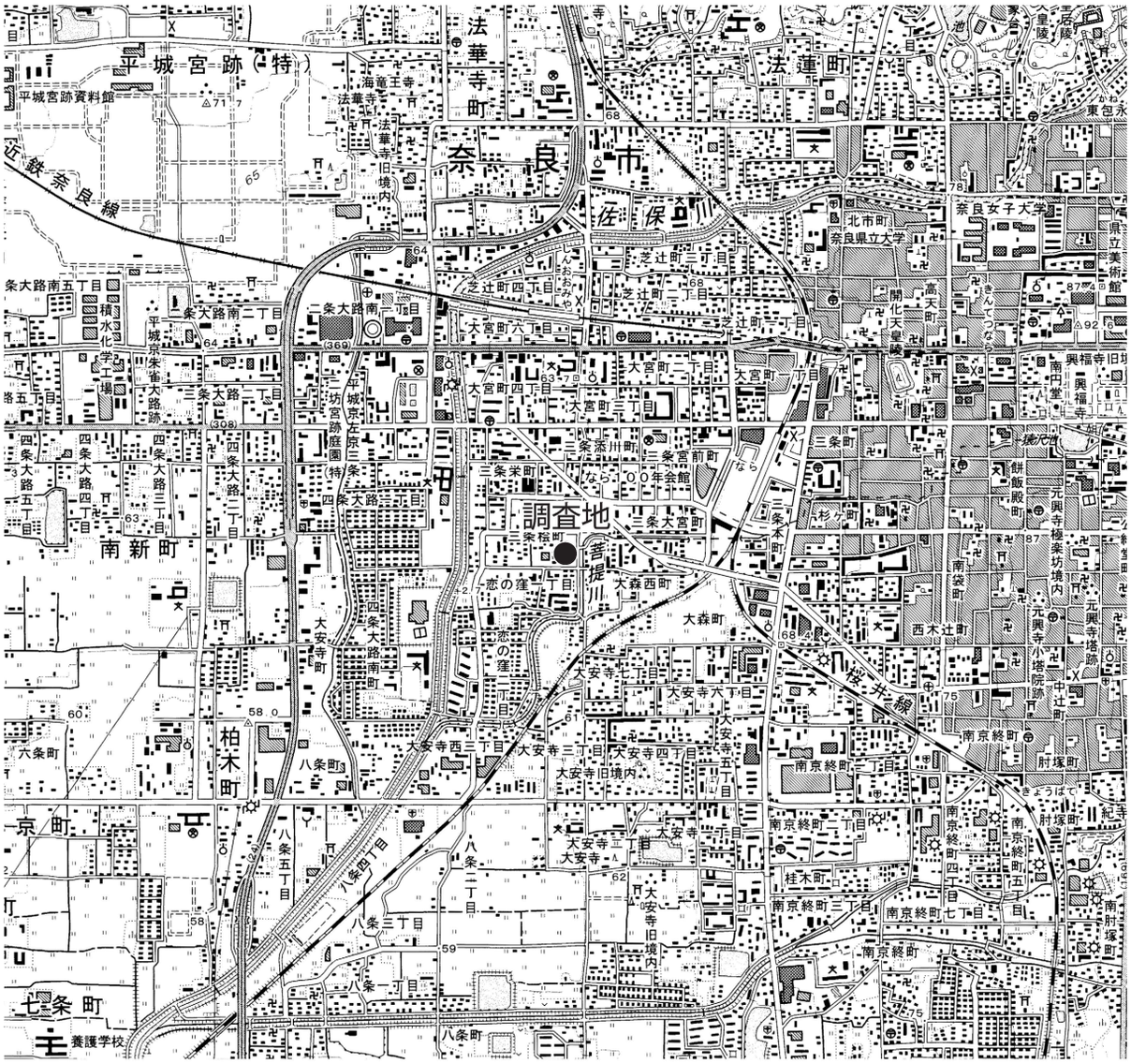


Fig.1　調査地点位置図（1/25000）

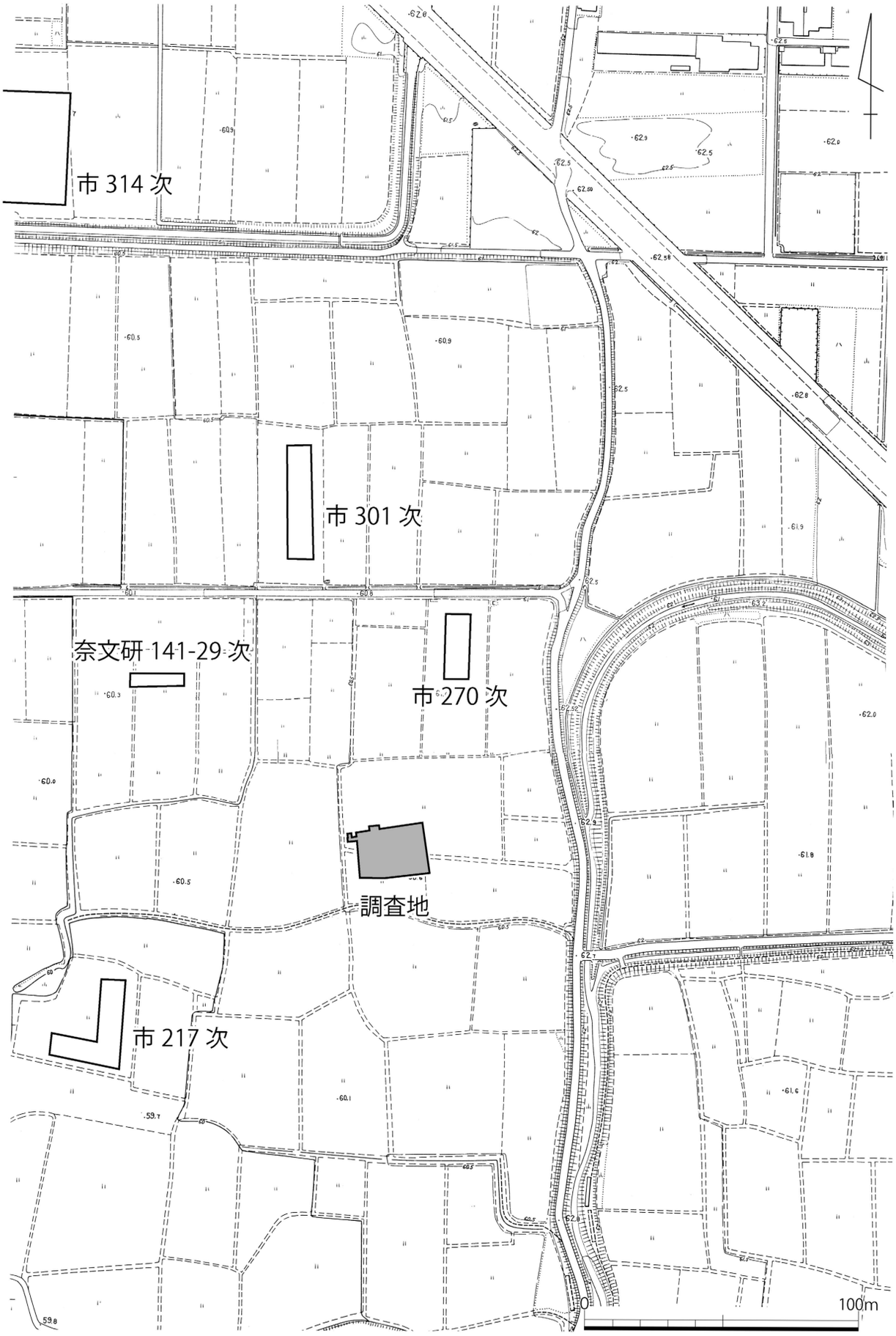


Fig.2　調査地周辺の調査状況（1/2000）

（2）調査体制

発掘調査及び遺物整理・報告書作成は以下の体制で実施した。

調査指導：奈良県教育委員会・奈良市教育委員会

調査主体：㈶元興寺文化財研究所

理事長　辻村泰善

所長　　坪井清足

事務局長　奥洞二郎

研究部長　狭川真一

人文考古学研究室

室長　伊藤健司

主任研究員　佐藤亜聖・角南聡一郎

研究員　坂本亮太・村田裕介

特任学芸員　岡本広義

現地作業員：株式会社 アイデイエイ

調査補助員：武田浩子・仲井光代・奥田智代（人文考古学研究室）、小幡千晶（奈良教育大学）、榊真麻（奈良大学）

発掘調査及び遺物整理にあたり、多くの方々からご指導・ご助言をいただいた。記して感謝申し上げます。（敬称略）

西藤清秀（奈良県教育委員会）、森下恵介・篠原豊一・久保邦江・森下浩行・鐘方正樹（奈良市教育委員会）

（3）周辺の調査

当該調査地と同じ左京四条三坊十三坪内では、他に１地点で発掘調査が実施されており、奈良時代の掘立柱建物１棟が検出されている（立石 1993）。また周辺ではいくつかの発掘調査が実施されている（Fig.2）。左京四条三坊十二坪が昭和57年度に調査されており、奈良時代の掘立柱建物６棟が重複して検出されている（奈良国立文化財研究所編 1983）。左京四条三坊十四坪では、奈良時代の掘立柱建物５棟、土坑１基が検出されている（池田 1995）。更に南の左京五条三坊九坪では、奈良時代以前の河道１条、奈良時代の掘立柱建物１棟、鎌倉時代の溝２条、近世の土坑１基が検出されている（篠原・原田 1991）。また、北西の四条三坊十坪では、奈良時代の掘立柱建物４棟、塀２条、井戸３基などが検出されている（松浦 1995）。

【参考文献】

池田裕英 1995「11 平城京左京四条三坊十四坪の調査　第301次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成６年度』奈良市教育委員会 p.66

篠原豊一・原田憲二郎 1991「21. 平城京左京五条三坊九坪の調査　第217次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成２年度』奈良市教育委員会 p.80-81

立石堅志 1993「23 平城京左京四条三坊十三坪の調査　第270次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成４年度』奈良市教育委員会 p.112

松浦五輪美 1995「21 平城京左京四条三坊十坪の調査　第314次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成６年度』奈良市教育委員会 p.88-97

奈良国立文化財研究所編 1983「11 左京四条三坊十二坪の調査　第141-29次」『昭和57年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』奈良国立文化財研究所 p.55

第２章　調査の成果

調査の結果、調査区のほぼ全面に遺構が存在しており、方形周溝墓、掘立柱建物、柵列、土坑、素掘溝などを検出した。

（1）層序

調査直前は水田であった。表土下約15～20㎝の間は現代の耕土が乗り、その直下に中近世の耕土と考えられる明灰色粘質土が約15～20㎝堆積していた。これを除去すると、淡黄灰色粘質土があり、この層にすべての遺構が掘り込まれていた。淡黄灰色粘質土は地山と認識した（Fig.3）。なお、地山と認識した部分のうち調査区の北東部は砂礫層となっている。検出した東西幅約12m、南北幅約６ｍを測る。深さはトレンチを設定して一部分0.5m 程度掘り下げたがそれより深く、底は未確認である。礫層中からの出土遺物は、サヌカイト製の剥片を見出したのみである。

（2）遺構

方形周溝墓

ST120（Fig.4・5、Pla.2）

調査区中央北に位置する。周溝のみ残存し、マウンドや主体部は削平のため失われていた。周構は、四隅が切れた状態で検出されている。溝の埋土観察からは、周溝墓が造られた後にゆっくりと溝が埋没していった様子が観察される。規模は周溝を含んで、東西12.5m、南北12.23m、周溝を除くと、東西11.0m、南北10.0m である。周溝は５つに分割された状態で残存する。北から逆時計回りにａ・ｂ・ｃ…と仮称している。周溝ａは長さ5.36m、幅0.15m、深さ0.2m である。周溝ｂは長さ5.0m、幅0.76m、深さ0.19m である。周溝ｃは長さ5.1m、幅0.11m、深さ0.2m である。周溝ｄは長さ2.76m、幅0.41m、深さ0.14m である。周溝ｅは長さ5.1m、幅0.95m、深さ0.07m である。周溝ｄは南隅で東方向に逆Ｔ字状に分岐しており、東側に更にもう１基の方形周溝が存在した可能性がある。溝ａから土器が出土し

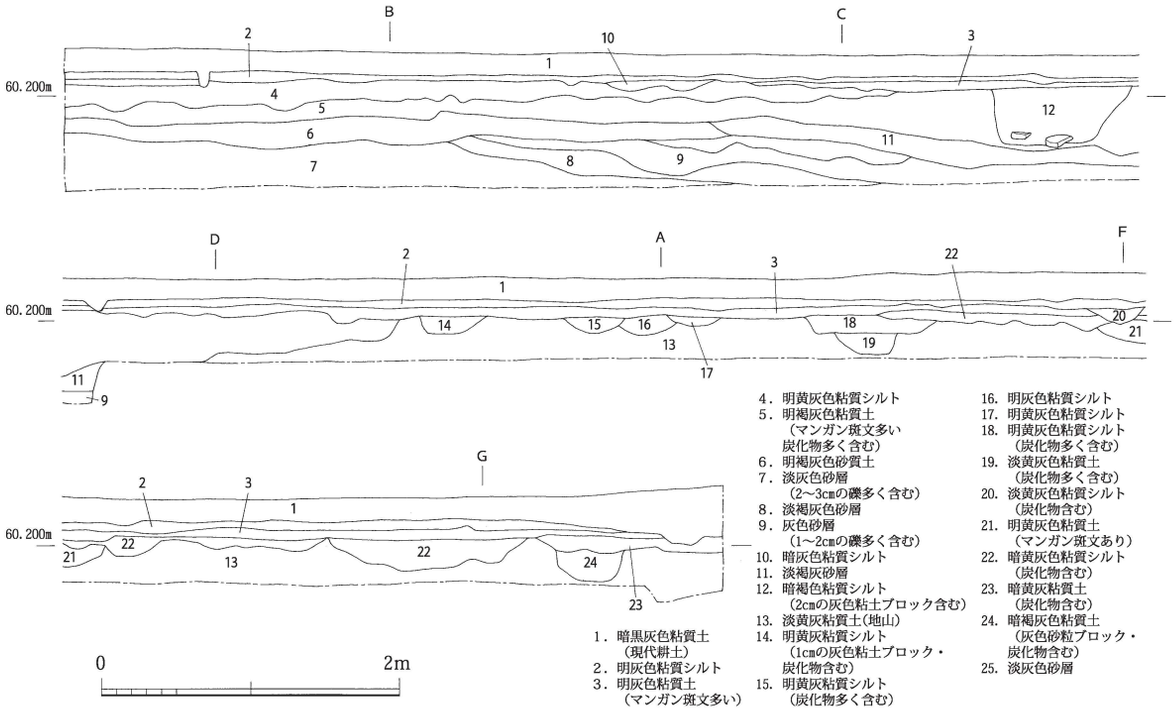


Fig.3　調査区東壁面土層観察図（1/50）

Fig.4　検出遺構配置図（1/150）

ている。出土遺物から弥生時代中期前半と考えられる。

掘立柱建物

SB005（Fig. 4・6、Pla.2）

調査区北西に位置し、桁行３間（5.45m）、梁行２間（3.62m）の南北棟建物である。建物の主軸方位は、N-3°40′-W である。柱掘方は隅丸方形で、一辺0.58～0.78m、検出面からの深さ0.23～0.38m である。柱掘方は北西隅から時計回りに a・b・c…と仮称している。柱掘方 a は SB010を、柱掘方 c ～ f は ST120西周溝を切っている。土層観察から柱の太さは、a が22㎝、b が20㎝、c が26㎝、d が22㎝、e が21㎝、f が20㎝、g が23㎝、h が25㎝、i が22㎝である。柱の抜き取り痕跡は認められなかった。出土遺物は、奈良時代前半～中頃のものである。

SB010（Fig. 4・7、Pla.2）

調査区北西に位置する、桁行２間（4.34m）以上、梁行５間（10.64m）の東西棟建物である。建物の主軸方位は、N-2°40′-W である。柱掘方は隅丸方形で、一辺0.71～092m、検出面からの深さ0.29～0.49m である。北辺は調査区外であったため検出されていない。掘方は北東隅から時計回りに a・b・

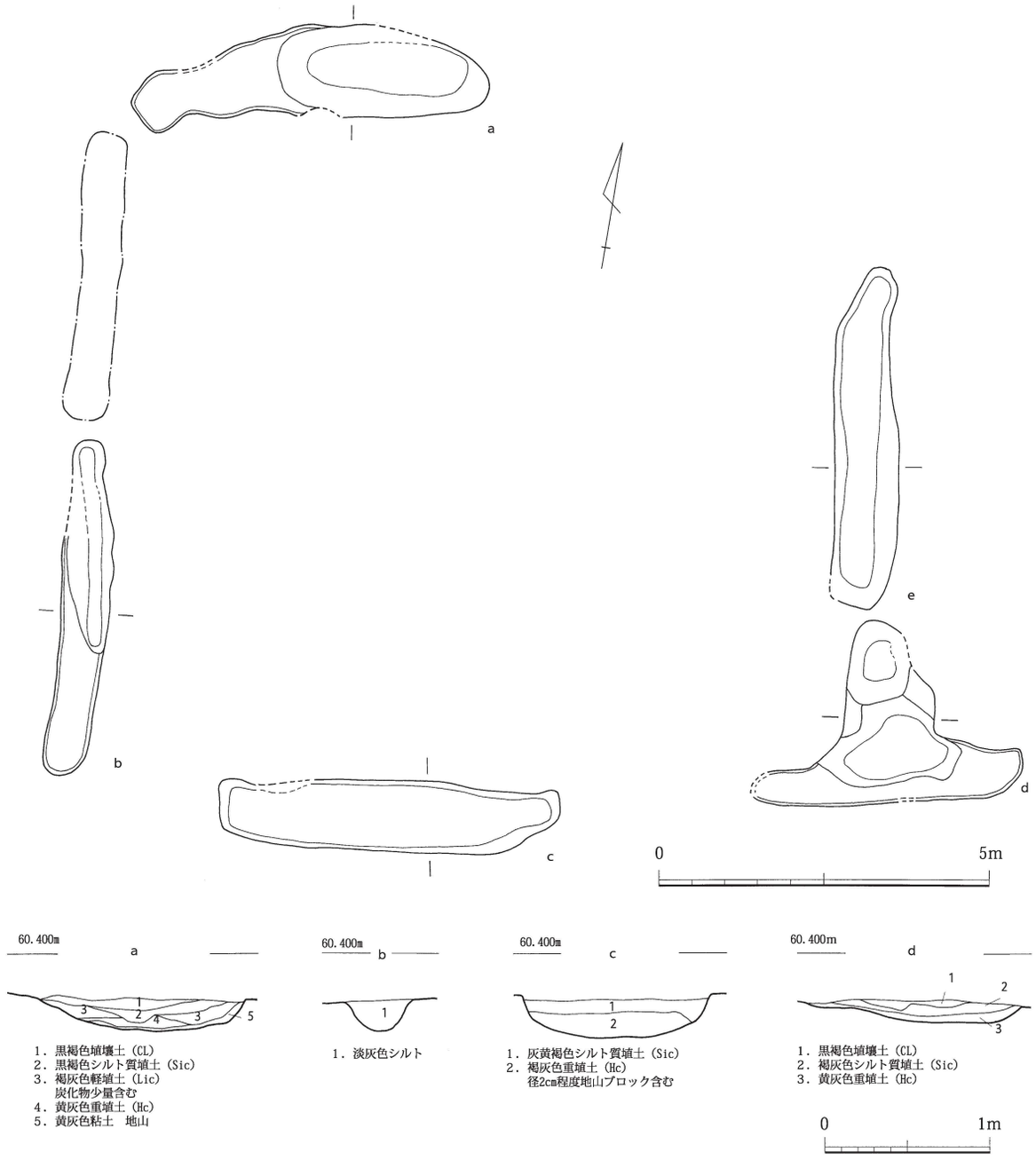


Fig.5　ST120 実測図（1/100）　土層観察図（1/40）

c…と仮称している。当初、調査区内からは、掘方ｂ～ｇまでが検出されたが、建物のプランを確認するため、柱掘方ｂの北側と柱掘方ｇの西側を拡張した結果、桁行２間以上、梁行５間であることが確認された。柱掘方ｃ及びｆには柱根が一部残存していた。柱掘方ｈのみ柱の抜き取りが認められる。抜き取り痕は長方形を呈し、東西0.53m、南北0.76m、深さ0.09m である。柱掘方ｂのみ極端に浅い。柱

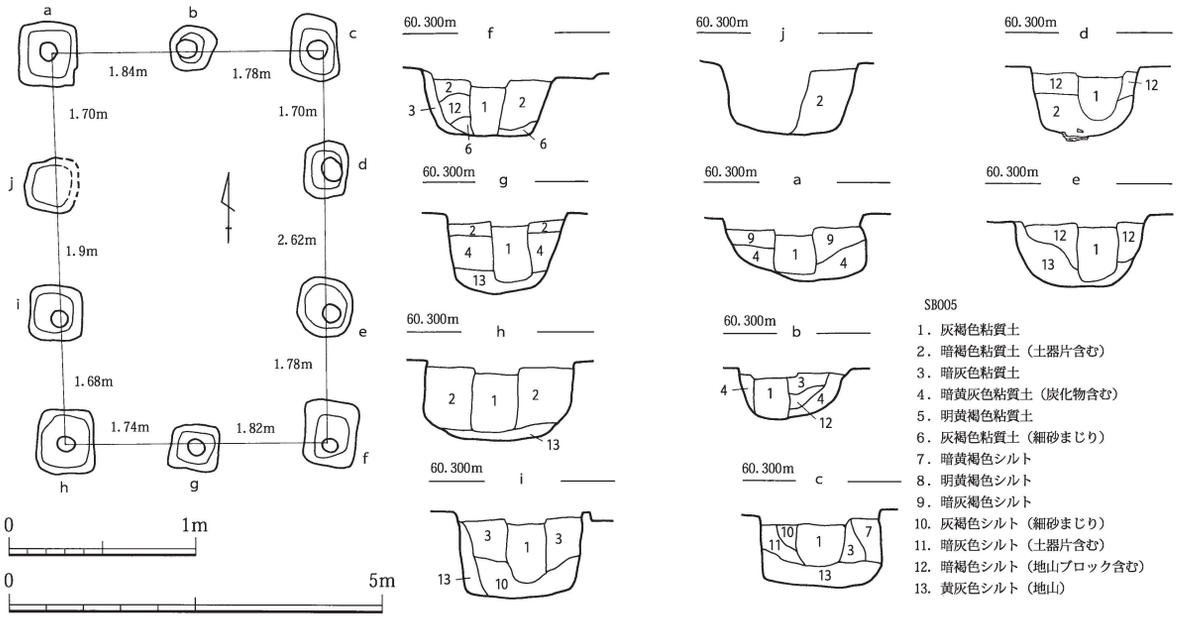


Fig.6　SB005 実測図（1/100）　土層観察図（1/40）

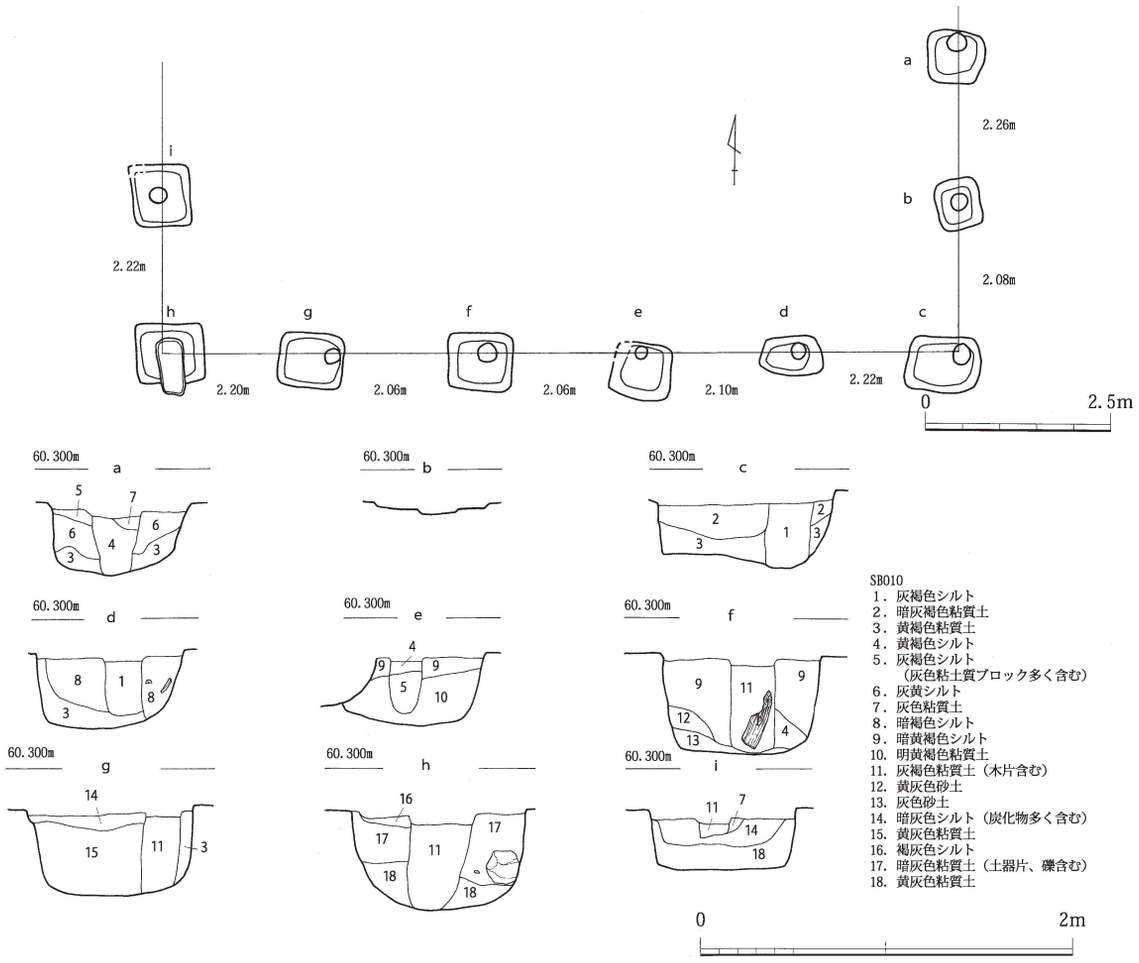


Fig.7　SB010 実測図（1/100）　土層観察図（1/40）

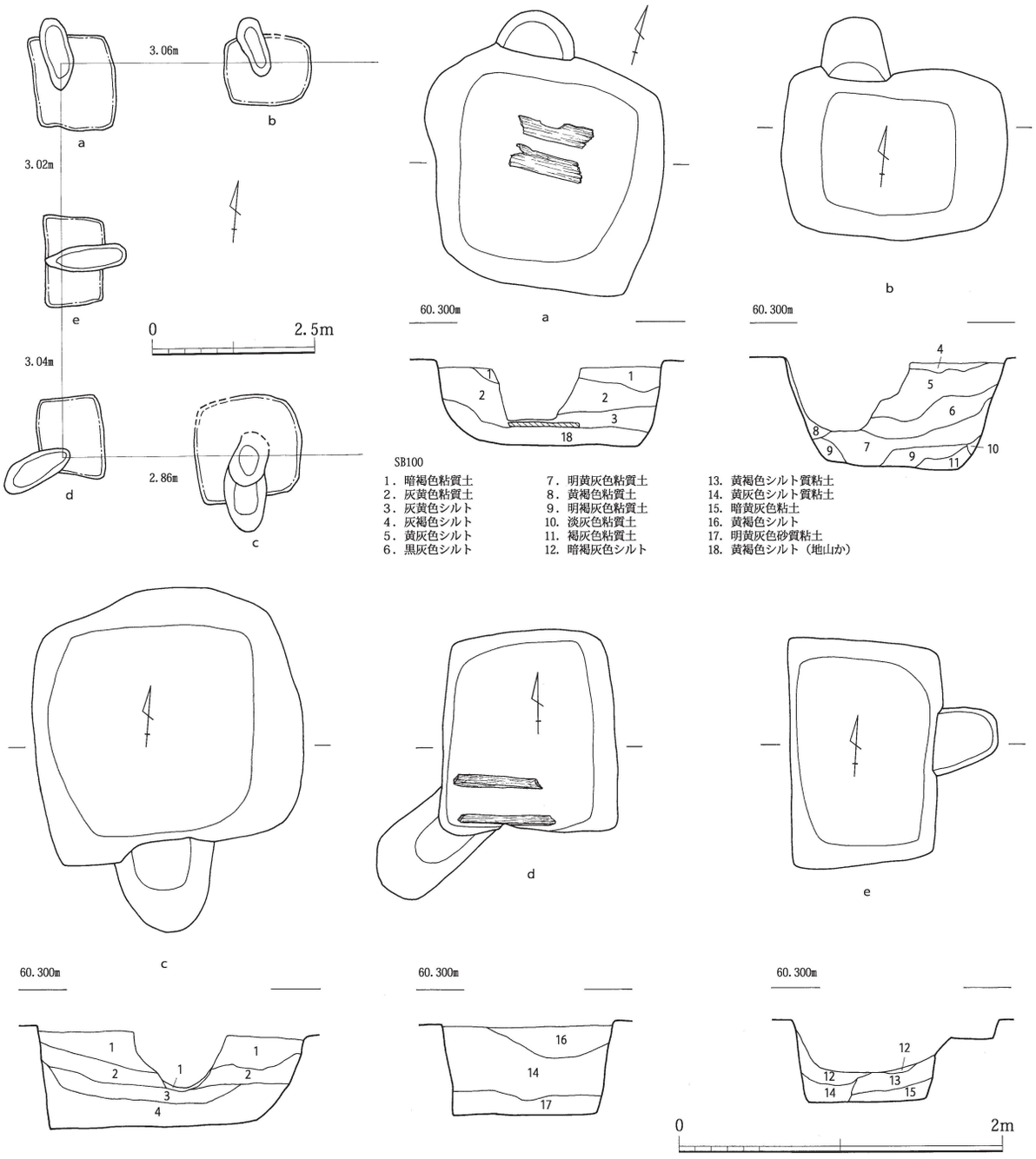


Fig.8　SB100 実測図（1/100）及び柱掘方土層観察図（1/40）

の太さは、a が28㎝、c が24㎝、d が22㎝、e が18㎝、f が24㎝、g が22㎝、i が16㎝である。樹種同定の結果、柱掘方 c 柱根はヒノキ、柱掘方 f 柱根はヒノキ亜科であることがわかった（第３章参照）。

SB100（Fig. 4・8、Pla.3）

調査区南東に位置する、桁行２間（6.06m）、梁行１間（3.06m）以上の東西棟建物である。建物の主軸方位は、N-6°40′-W である。柱掘方は隅丸方形で、一辺1.05～1.65m、検出面からの深さ0.48～0.55m である。東部分は調査区外であったため検出されていない。掘方は北西隅から時計回りに a・b・c…と仮称している。いずれの掘方も、柱の抜き取り痕が認められる。抜き取り痕の規模は、長さ0.28～0.7m、幅0.42～0.62m、深さ0.2～0.39m である。柱掘方 a 及び柱掘方 d には礎板が、２本並行して置かれた状態で残存していた。樹種同定の結果、柱掘方 a 礎板はヒノキ亜科であることがわかった（第

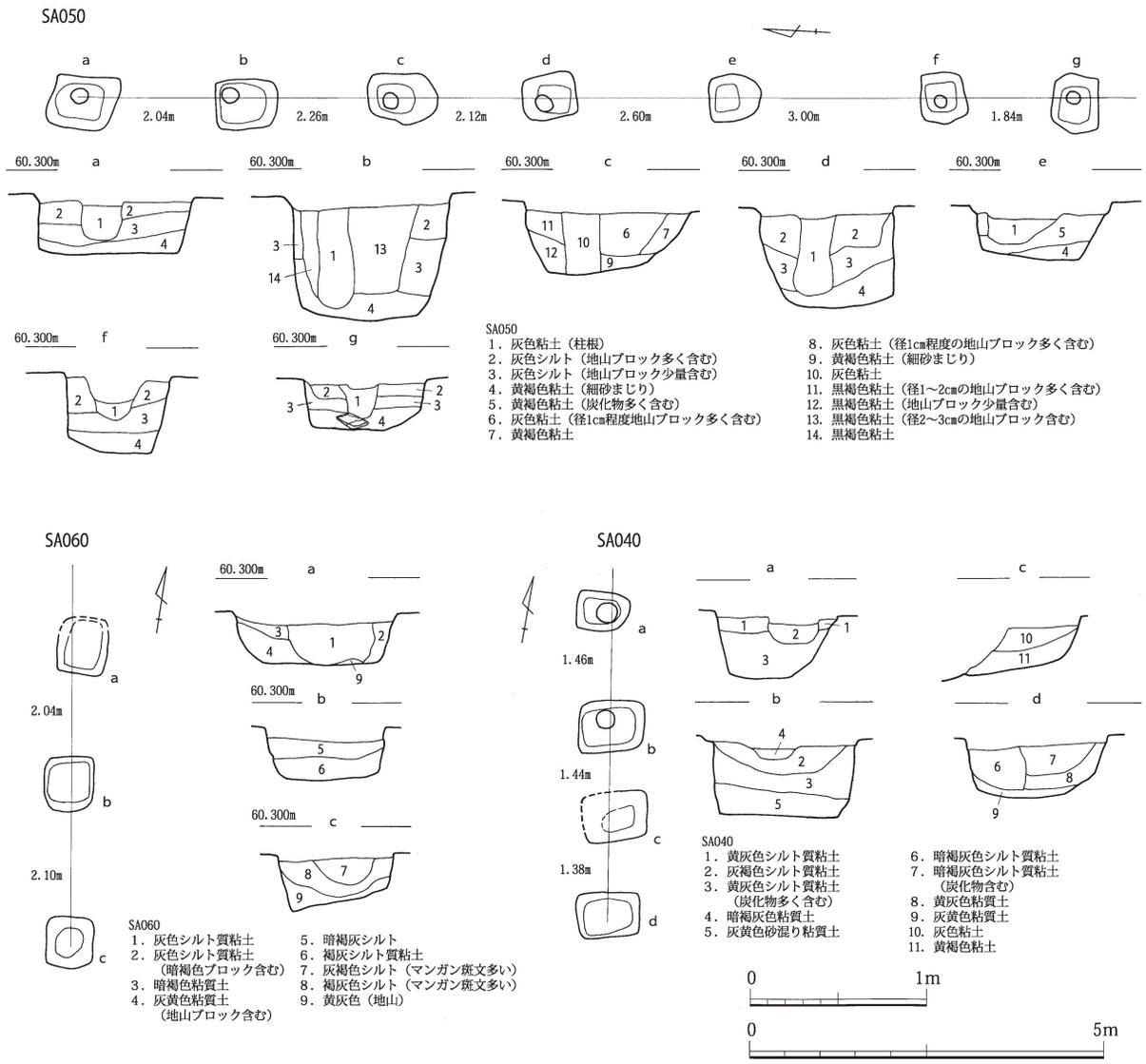


Fig.9　SA040・SA050・SA060 実測図（1/100）　土層観察図（1/40）

３章参照)。

柱の抜き取り方向は、北側柱列は北側へ、南側柱列はおおむね南側へ、掘方 e のみ東へ倒して抜き取っている。建物の上部構造を解体した後に最終的に柱を抜き取った様子が窺える。

柱列

SA040（Fig. 4・9、Pla.1）

調査区南に位置する、南北方向の柱列である。主軸方位は、N-11°10′-W である。検出長は３間分（4.28m）で、柱掘方は隅丸方形を呈し、一辺0.68～0.79cm、検出面からの深さ0.29～0.39m である。掘方は北から南に a・b・c…と仮称している。a・b には柱痕が認められた。柱の太さは、a が30㎝、b が22㎝である。

SA050（Fig. 4・9、Pla.1）

調査区南に位置する、東西方向の柱列である。主軸方位は、N-84°30′-E である。検出長は６間分（13.86m）で、柱掘方は隅丸方形を呈し、一辺0.58～0.87m、検出面からの深さ0.26～0.63m である。掘方は西から東に a・b・c…と仮称している。e を除いて柱痕が認められた。柱の太さは、a が24㎝、b が22㎝、c が20㎝、d が24㎝、f が20㎝、g が22㎝である。掘方 c は柵列 SA070を切っている。

SA060（Fig.4・9、Pla.1）

調査区中央北に位置する、南北方向の柱列である。主軸方位は、N-2°10′-W である。検出長は２間

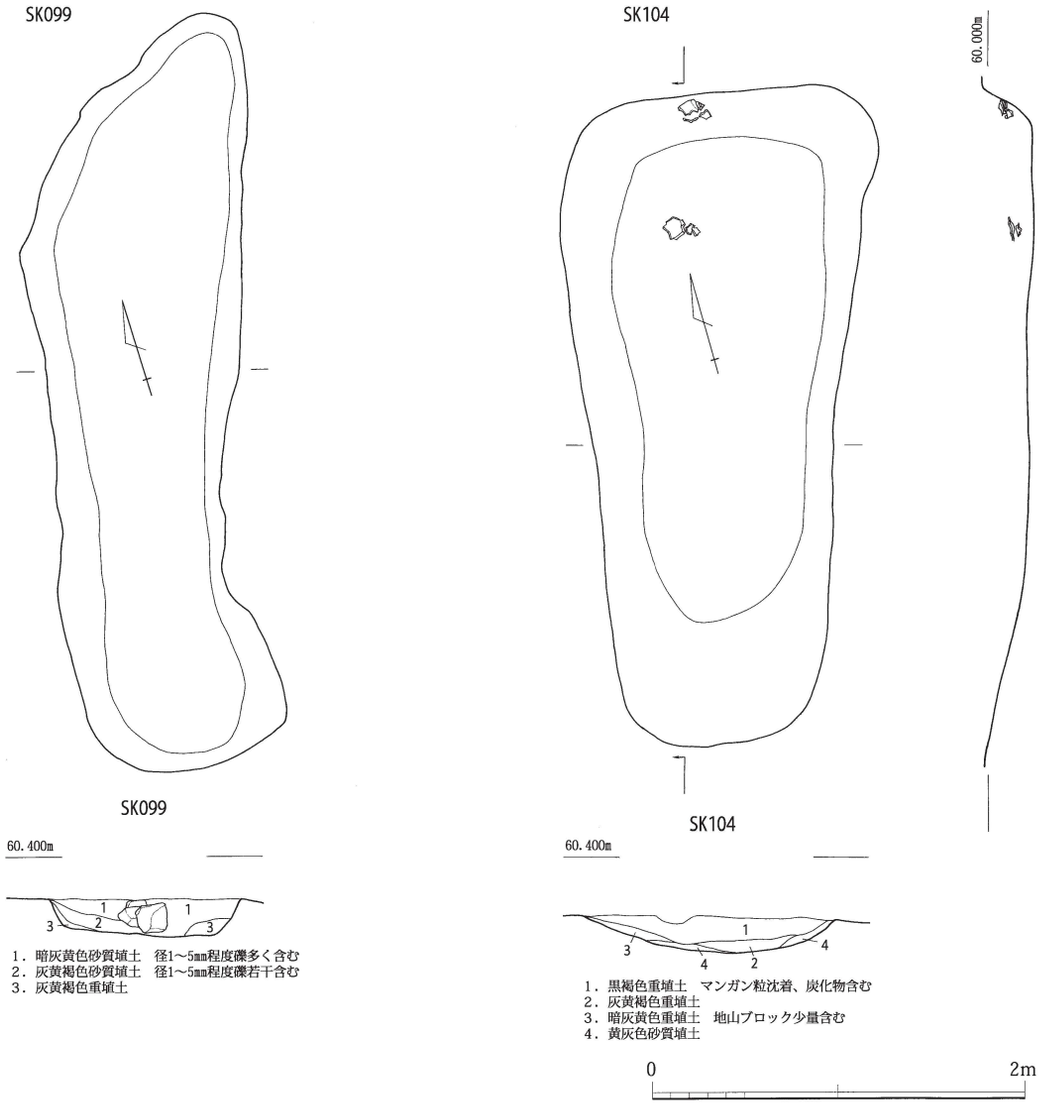


Fig.10　SK099・104　平面図・土層観察図（1/40）

分（4.14m）で、柱掘方は隅丸方形を呈し、一辺0.64～0.87m、検出面からの深さ0.22～0.27m である。掘方は北から南に a・b・c と仮称している。柱痕は認められなかった。掘方 a は ST120北周溝を切っている。

土坑

SK099（Fig. 4・10、Pla.1）

調査区中央で検出した、軸線を南北方向にとる不定形の土坑である。東西1.08m、南北4.04m、深さ0.2m である。遺構内からは多量の遺物が出土した。遺物の中でも特異なのは、溶着した瓦で、瓦窯の溶壁と考えられるものである。出土遺物から本遺構の時期は奈良時代後半と考えられる。

SK104（Fig. 4・10、Pla.1）

調査区西で検出した、軸線を南北方向にとる隅丸長方形の土坑である。東西1.67m、南北3.47m、深さ0.19m である。遺構内からは弥生土器が出土したのみである。出土遺物から、本遺構の帰属時期は、弥生時代中期前半と考えられ、周溝墓との関連を窺わせる。

溝

SD102（Fig. 4・18、Pla.1）

調査区中央付近で検出された、東西方向の素堀溝である。長さ170㎝、幅25㎝、深さ５㎝である。

その他の遺構

SX006（Fig.4、Pla.1）

調査区北で検出した、方形の柱穴状遺構である。東西64㎝、南北65㎝、深さ23㎝である。奈良時代の須恵器・土師器が出土した。

SX014（Fig.4、Pla.1）

調査区南東隅で検出した、方形の柱穴状遺構である。柱穴状遺構SX006に切られ大半は失われている。東西84㎝、深さ７㎝である。

SX059（Fig.4、Pla.1）

調査区北で検出した、方形の柱穴状遺構である。東西83㎝、南北148㎝、深さ15㎝である。奈良時代の須恵器・土師器が出土した。

SX067（Fig.4、Pla.1）

調査区北で検出した、方形の柱穴状遺構である。柱穴状遺構SX059に切られる。東西95㎝、南北97㎝、深さ35㎝である。

SX008（Fig.4、Pla.1）

調査区南東隅で検出した、ピットである。円形を呈し、直径26㎝、深さ10㎝である。

SX024（Fig.4、Pla.1）

調査区中央付近で検出した、ピットである。円形を呈し、直径45㎝、深さ９㎝である。

SX126（Fig.4、Pla.1）

調査区西付近で検出した、ピットである。円形を呈し、直径42㎝、深さ９㎝である。

SX131（Fig.4、Pla.1）

調査区中央南で検出した、ピットである。素堀溝に切られ上面を削平されている。円形を呈し、直径58㎝、深さ37㎝である。

（3）出土遺物

ST120出土遺物（Fig.11、Pla.4）

弥生土器

壺（2）　底部のみ残存し、底径8.4㎝である。外面には工具痕が認められる。

甕（1）　底部のみ残存し、底径5.8㎝である。外面は粗いハケ調整をし、底部内面には指頭圧痕が残る。いずれも弥生時代中期前半と考えられる。

SB005出土遺物（Fig.12、Pla.4）

須恵器

壺（3・5）　３は口縁部のみ残存するが、細片のため口径復元は困難である。内外面とも回転ナデを施す。柱掘方ａ出土。５は底部のみ残存する。底径10.0㎝で底部に高台を貼り付ける。

杯蓋（4）　口縁部から天井部にかけて残存するが、細片のため口径復元は困難である。杯Ｂの蓋と考えられる。天井部外面は左回りに回転ヘラケズリ、口縁部内外面は回転ナデを施す。柱掘方ａ出土。

杯身（6）　口縁部から底部が残存する。口径13.6㎝、器高3.0㎝である。底部外面は回転ヘラケズリの後にナデを施す。杯Ａである。柱掘方ｅ出土。

土師器

皿（1）　皿としたが細片のため、杯の可能性もある。底部に指頭圧痕が認められる。柱掘方ｃ出土。

椀（2）　口縁部のみ残存するが、細片のため口径復元は困難である。

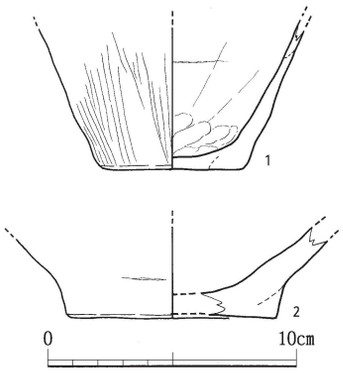


Fig.11　ST120 出土土器実測図（1/3）

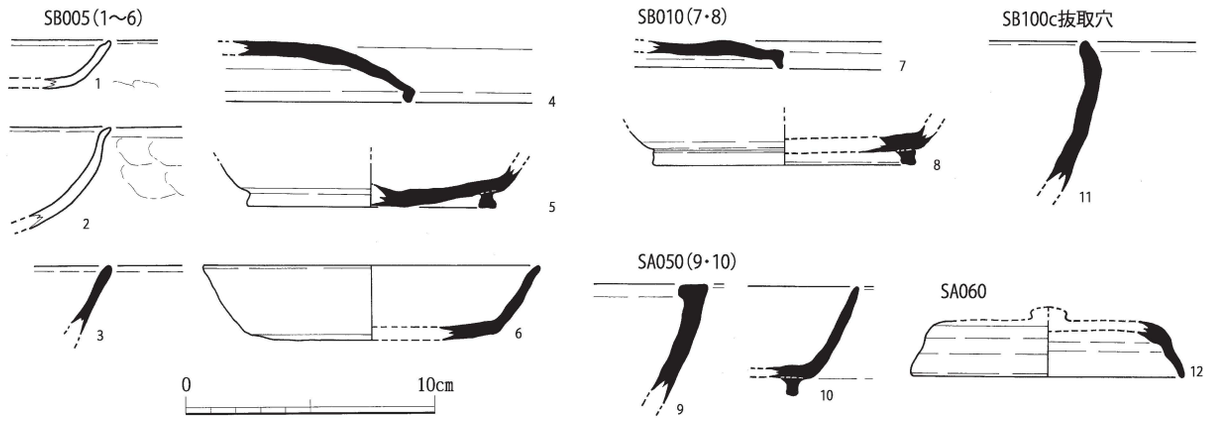


Fig.12　掘立柱遺構関係出土土器実測図（1/3）

外面はケズリ後にナデを施す。柱掘方ａ出土。

SB010出土遺物（Fig.12、Pla.4）

須恵器

杯蓋（7）　口縁部のみ残存するが、細片のため口径復元は困難である。杯Ｂの蓋と考えられる。口縁部内外面は回転ナデを施す。柱掘方ｇ出土。

杯（8）　底部のみの細片で底径10.6㎝である。底部外面に回転ヘラケズリの後に高台を貼り付けナデを施す。杯Ｂである。柱掘方ｄ出土。

SB100出土遺物（Fig.12・13、Pla.4）

須恵器

鉢（11）　口縁部のみの細片である。口縁端部は内傾し内外面とも回転ナデを施す。鉢Ａ。柱ｃ抜取穴出土。

木製品

礎板（1・2）　１は長さ62.0㎝、幅9.1㎝、厚さ5.3㎝で、２は長さ61.3㎝、幅8㎝、厚さ6.7㎝で、いずれも柱掘方ｄ出土で、両端部及び裏面は腐食及び欠損する。針葉樹である。

SA050出土遺物（Fig.12、Pla.5）

須恵器

鉢（9）　口縁部のみの細片である。口縁端部は肥厚し面を持つ。内外面ともに回転ナデを施す。柱掘方ａ出土。

杯（10）　口縁から底部にかけての細片で、器高4.4㎝である。内外面とも回転ナデを施し、高台を貼り付ける。杯Ｂ。柱掘方ａ出土。

SA060出土遺物（Fig.12）

須恵器

蓋（12）　口縁部のみ残存し、口径10.9㎝である。恐らくは天井部に宝珠形のつまみが付けられていたと考えられる。口縁部は強い回転ナデを施す。柱掘方ｂ出土。

SK099（Fig.14、Pla.5・6）

須恵器

蓋（9・10）　９は口径11.8㎝、器高2.1㎝で、天井部外面

Fig.13　掘立柱遺構関係出土土器実測図（1/4）

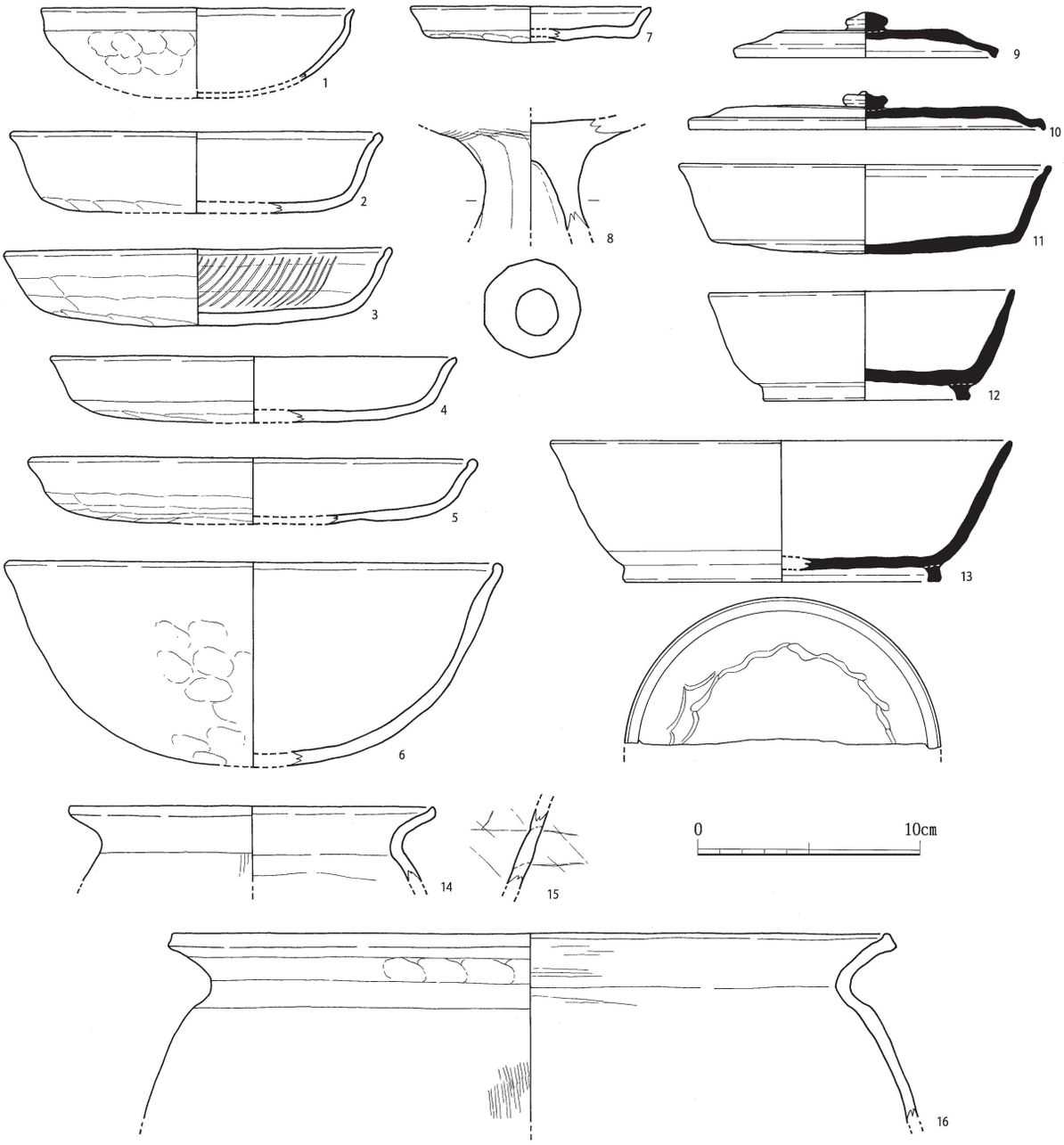


Fig.14　SK099 出土土器実測図（1/3）

は回転ヘラ削り後に宝珠つまみを貼り付ける。つまみ部径1.9㎝。口縁部外面付近に重ね焼き痕が認められる。10は口径16㎝、器高1.6㎝で宝珠つまみを貼り付ける。内面に重ね焼きの際の融着痕が認められる。いずれも杯Ｂの蓋と考えられる。

杯（11・12・13）　11は口径16.8㎝、器高4.1㎝で口縁内外面に回転ナデを施し、口縁部外面には重ね焼痕がある。底部外面はヘラ切り後にナデ調整をする。杯Ｃ。12は口径13.8㎝、器高５㎝、底径9.5㎝である。口縁部内外面は回転ナデを施し、底部外面は回転ヘラ切り後に高台を貼り付ける。杯Ｂ。13は口径20.7㎝、器高6.4㎝である。底面は回転ヘラ削り後にナデ調整をし、高台を貼り付ける。底部外面にヘラ状工具による波状文様が残る。杯Ｂである。

土師器

椀（1）　口径14㎝、器高3.3㎝で口縁端部はやや外傾する。胴部外面には指頭圧痕が残る。

杯（2・3・4）　２は口径16.6㎝、器高3.7㎝で内外面に横方向のナデをし、底部外面ヘラケズリを施す。杯Ａ。３は口径7.6㎝、器高3.5㎝で、見込みに正放射状暗文を施す。杯Ａ。４は口径18.4㎝、器高３㎝で口縁部は横方向のナデを施し、底部外面は軽いケズリの後にナデをする。杯Ｃである。

皿（5・7）　5は口径20㎝、器高３㎝で底部外面はユビオサエ後に軽いケズリをする。皿Ａ。７は小型品で、口径10.8㎝、器高2.1㎝である。底部外面には指頭圧痕が認められる。皿Ｃである。

鉢（6）　口径22.4㎝、器高9.2㎝で、内外面に二次焼成痕がある。鉢Ｂ。

高杯（8）　基部のみ残存する。側面は11面の面取りをする。

甕（14・16）　14は口縁部のみ残存し、口径16.4㎝である。二次焼成を受ける。16は口縁部から胴部にかけて残存する。口径32.4㎝で、口縁端部はやや肥厚し、頸部外面には指頭圧痕が残る。胴部外面は縦方向のハケ調整をし、内面はナデをする。

製塩土器（15）　細片で、胎土は粗く内外面をナデ調整する。

瓦

溶着瓦塊（Pla. 6）　溶着した状態で７点が出土している。a は長さ21㎝、幅24㎝、厚さ21㎝で、平瓦５枚が溶着したものである。b は長さ21㎝、幅23㎝、厚さ16㎝で、平瓦４枚が溶着したものであるある。 c は長さ20㎝、幅22㎝、厚さ18㎝で、平瓦５枚が溶着したものであるある。 d は長さ24㎝、幅43㎝､厚さ26㎝で､平瓦10枚が溶着したものである。溶着塊中最大のものである。いずれも瓦は溶解し、歪んでいる。

SK104出土遺物（Fig.15、Pla.6）

壺（2･3）　２は底部のみ残存し、底径9.6㎝である。３は胴部下半から底部にかけて残存し、底径5.0㎝である。外面をナデ調整し、一部に黒斑が認められる。

土製品（1）　縦5.1㎝、横5.9㎝、厚さ3.2㎝で、胎土はやや粗い。いずれも弥生時代中期前半と考えられる。

SD102出土遺物（Fig.16、Pla.7）

緑釉陶器

椀（1）　高台部付近のみ残存し、細片のため皿の可能性もある。内面には二条の陰刻文が残る。 時期は９世紀後半～10世紀前半と考えられる。近江産か？

SX008出土遺物（Fig.16）

土師器

皿（2）　口縁部のみの細片で、外面には明瞭な指頭圧痕がある。時期は10世紀中頃と考えられる。

SX014出土遺物（Fig.16）

須恵器

椀（5）　口縁部から胴部にかけて残存し、口径18.2㎝である。内外面に回転ナデをし、外面底部付近に回転ヘラケズリを施す。

SX024出土遺物（Fig.16、Pla.7）

黒色土器

椀（6）　底部のみ残存し、底径7.6㎝である。内面には細かなミガキを施し、底部に断面三角形の高台を貼り付ける。時期は10世紀第２四半期と考えられる。

土師器

杯（7）　口縁部のみの細片である。外面に指頭圧痕が認められる。杯Ａ。時期は10世紀第２四半期と考えられる。

灰釉陶器

椀（8）　内外面に薄く灰釉が施される。時期は10世紀第２四半期と考えられる。

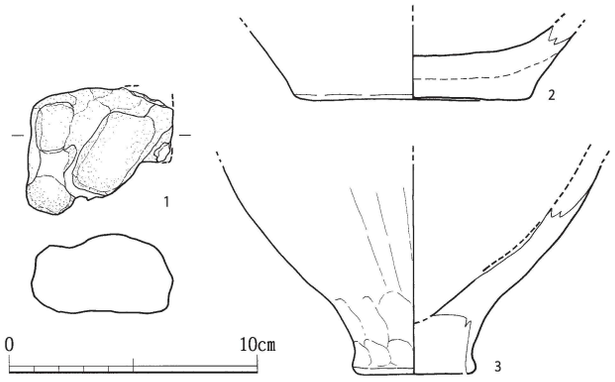


Fig.15　SK104 出土土器実測図（1/3）

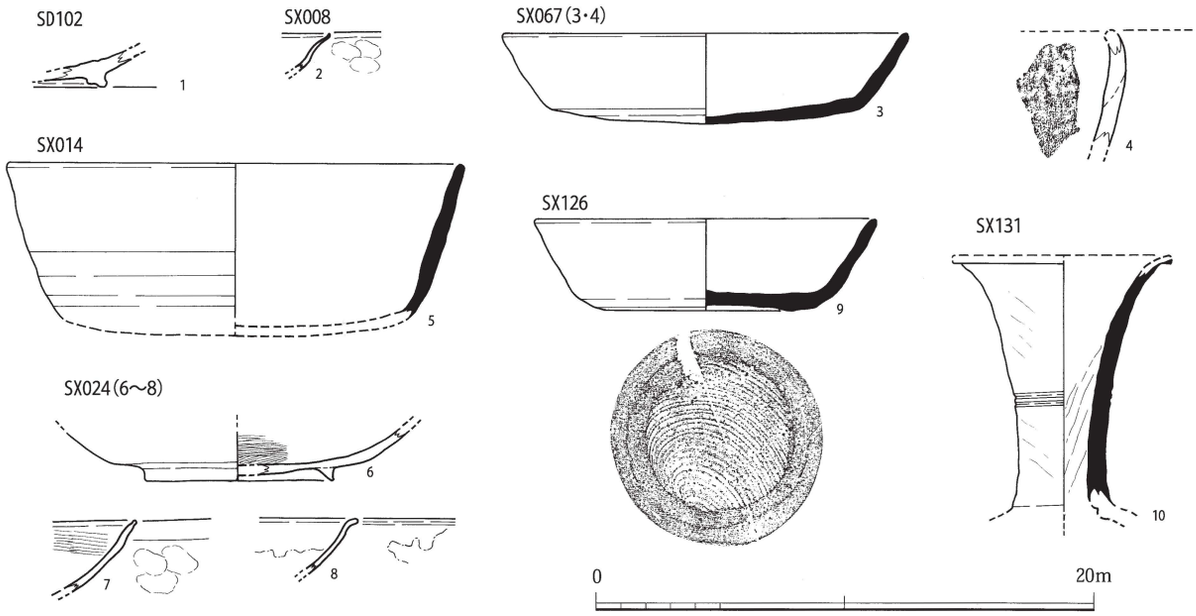


Fig.16　その他の遺構出土土器実測図（1/3）

SX067出土遺物（Fig.16、Pla.7）

須恵器

杯（3）　口径16.2㎝、器高3.7㎝で、口縁部は回転ナデをし、底部外面はヘラ切り後にナデを施す。杯A。

製塩土器（4）　口縁部のみの細片で、内面に布目圧痕が残存し、外面はユビオサエ後にナデ調整を施す。

SX126出土遺物（Fig.16、Pla.7）

須恵器

杯（9）　口径13.8㎝、器高3.7㎝で口縁部外面付近には重ね焼痕が認められる。底部端には右回り方向の回転ヘラケズリ痕があり、底面に明瞭な回転糸切り痕が残る。

SX131出土遺物（Fig.16、Pla.7）

須恵器

水瓶（10）　口縁部のみ残存するが、口縁端部は欠損する。内面にはシボリ痕が残り、外面には二条の凹線が巡る。

第３章　平城京左京四条三坊十三坪出土木製品の樹種同定

はじめに

平城京左京四条三坊十三坪より出土した下記の木製品３点について樹種同定を行なった。

（1）試料

№1 礎板　SB100a、　№2　柱根　SB010c、　№3　柱根　SB010f

（2）同定方法

樹種同定に必要な木口面（横断面）、板目面（接線断面）、柾目面（放射断面）の３断面の切片を安全カミソリを用いて作製し、サフラニンで染色後、水分をエチルアルコール、ｎ－ブチルアルコール、キシレンに順次置換した。その後、非水溶性封入剤を用いて永久プレパラートを作製し、光学顕微鏡で観察した。

（3）同定結果

各試料の木材組織は顕微鏡写真の通りである。以下に樹種同定結果とその根拠となる木材組織の特徴について記す。樹木分類および植生分布は『原色日本植物図鑑木本編』（Ⅱ）に従った。同定は木沢直子（木器保存研究室）が行った。

※　　樹木の性質、材の用途、出土事例等については後記の文献を参考とした。

№1　礎板　SB100a

ヒノキ亜科　Subfam. Cupressioideae　　ひのき科（Cupressaceae）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に点在する。放射組織は単列で２～８細胞高。分野壁孔は１分野に２～４個を確認できるが、木材組織の劣化によりやや不明瞭であるためヒノキ亜科とした。ヒノキ亜科に含まれる樹種にはヒノキ属（ヒノキ、サワラ）、アスナロ属（アスナロ）、クロベ属（クロベ（ネズコ））などが含まれる。このうち木口面における移行の特徴からヒノキ属、アスナロ属の樹種である可能性が高い。

№2　柱根　SB010c

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endlicher

ひのき科（Cupressaceae）ヒノキ属（Chamaecyparis）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は早材から晩材への移行付近および晩材部に接線状に配列する。分野壁孔はヒノキ型で、１分野に２個見られた。放射組織は単列で２～13細胞高である。

分　　布：本州（福島県以南の主として太平洋側）、四国、九州（屋久島まで）

樹　　形：常緑高木で直幹性。樹高30m、胸高直径１mに達する

用　　途：建築、彫刻、家具、器具、船、漆器　等

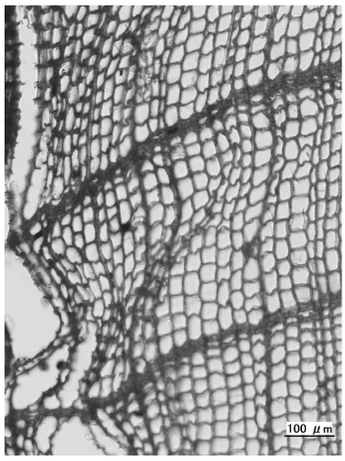
出土事例：建築材、木簡、祭祀具（斎串、形代）、下駄、箸、紡織具、刀剣鞘、容器（折敷、曲物、桶、底板）等

№3　柱根　SB010f

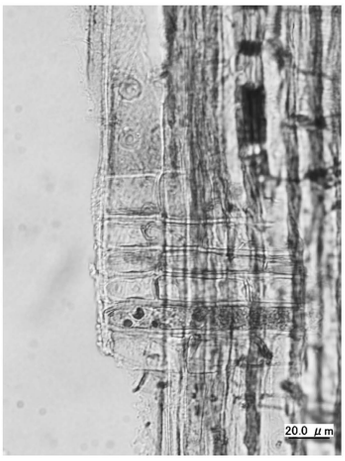
ヒノキ亜科　Subfam. Cupressioideae　　ひのき科（Cupressaceae）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は狭い。樹脂細胞は早材から晩材への移行部に散在する。分野壁孔はかろうじてヒノキ型を確認することができ、１分野に１～２個見られる。放射組織は単列で２～16細胞高である。木材組織の劣化が顕著であり、分野壁孔がやや不明瞭であったためヒノキ亜科とした。このうち分野壁孔の特徴からヒノキ属、アスナロ属の樹種である可能性が高い。

№1　礎板　SB100a　　ヒノキ亜科　Subfam. Cupressioideae



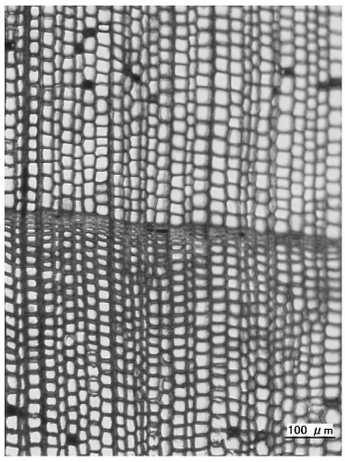
木口面



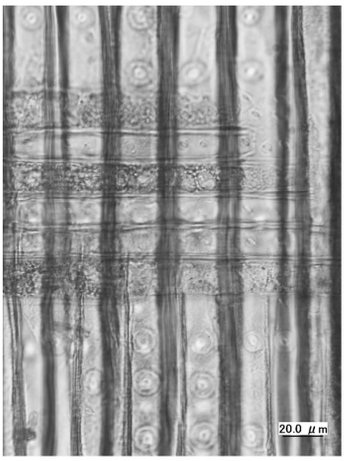
柾目面

板目面

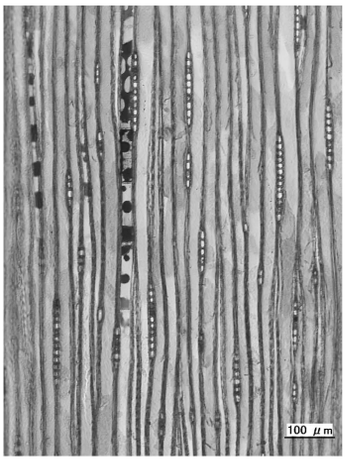
№2　柱根　SB010c　　ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endlicher



木口面

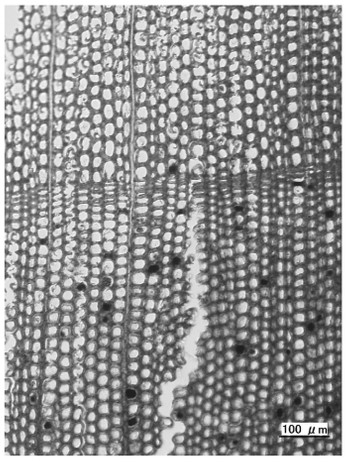


柾目面

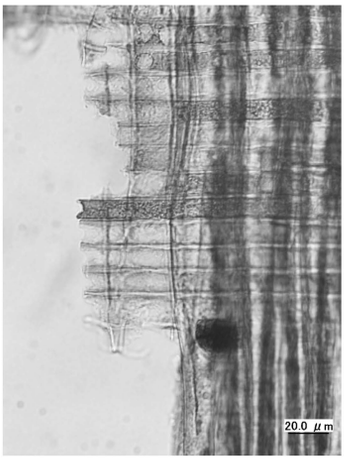


板目面

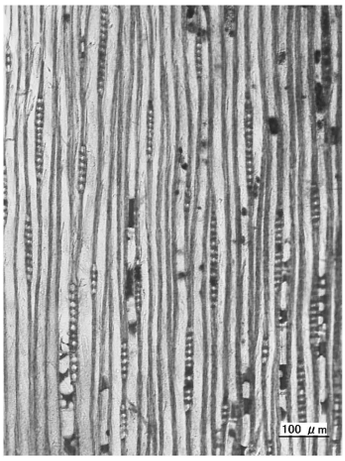
№3　柱根　SB010f　　ヒノキ亜科　Subfam. Cupressioideae



木口面



柾目面



板目面

Fig.17　木材組織顕微鏡写真

【参考文献】

島地謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社

北村四郎・村田源 1979『原色日本植物図鑑・木本編２』保育社

島地謙・伊東隆夫 1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣

第４章　総　括

【掘立柱建物】

主軸が正方位に近い一群（N-2～3°-W）が今次の検出建物の大半をしめる。調査範囲が狭いので、建物相互の関係や敷地内での土地利用法等は把握し難いが、類似した振れを有する建物でも切り合い関係があることから、２時期以上の変遷が確認される。

さらに南東隅で検出したSB100は、他とは隔絶した規模の柱掘方を有する建物であり、主軸もN-6°-Wと西へ大きく振れている。正方位に近い一群とは、SA050との間に重複関係があるが切り合っておらず、SB100との直接的な関係は明確にしがたい。しかし、SB100の柱がすべて抜き取られていることを思うと、これが先行して存在した可能性を考えるのが妥当だろう。ただ、これに伴う建物は今次の調査範囲内では確認できておらず、その性格や敷地内での様相などは今後の課題として残るものである。

また、出土遺物は各柱穴から若干出土しているものの、年代を絞りこめるような安定した出土状況は認められない。総体として観察すると、８世紀前半から中頃のものと認識できる程度である。したがって、奈良時代の前半から中頃における土地利用の状況を把握したというにとどまるが、建物の密集度は低いながらも少なくとも３期程度の変遷が認められることは重要である。

周辺の調査地の成果とあわせて、今後詳細に検討すべきであろう。

【土坑】

奈良時代のSK099は、主軸を南北にとるが、SB005等の主軸に近く、関連性が想定される。特に詳細な報告を行なわなかったが、SK099以北には類似の長円形を呈する土坑状の遺構が並んでおり、当該敷地における廃棄空間の位置が知られるところである。

また、土坑内から出土した瓦が癒着した資料は、窯壁の一部とみられるものである。調査地の位置から想定すると、南約900mにある大安寺瓦窯跡が注意される。何ゆえにここに残欠がもたらされたのかを解明するのは難しいが、大安寺瓦窯の操業と何らかの関係を示唆する資料となるかも知れない。これも今後の課題として残るものである。

【方形周溝墓】

今回検出した弥生時代の方形周溝墓は、墳丘をまったく確認できない状態で四辺の溝のみの検出にとどまった。しかも、奈良時代の掘立柱建物がこの溝および本来墳丘が存在した部分に重複して建設されていることが確認できた。このことから、少なくとも平城京建設段階にはマウンドは削平されていたものと理解できる。

平城京建設過程において既存の墳墓を破壊していたことは、発掘調査の所見および『続日本紀』の記述からもよく知られている事実である。同様に弥生時代の墳墓についても、マウンドを有するものが邪魔であれば、造都の妨げとみなされて破壊されたことは充分に考えられるところであり、後の平安京でも、造営に際して多くの方形周溝墓が削平されていることが確認されている（財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006）。

今回の所見は、都城造営の際に古墳の破壊だけでなく、どの程度の方形周溝墓がどのように破壊されたかについても、古代の景観論や開発論と関連付けながら検討する必要があることを示唆するものである。今次の調査は、この問題に関して有意義な資料を提示できたものといえよう。

なお、平安時代以降では若干の遺物が見られるものの、明確な遺構は認められなかった。

【参考文献】

財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006『平安京右京五条三坊十四町跡現地説明会資料』

関　連　資　料

Fig.18　検出遺構略測図・遺構仮番号配置図（S=1/200）
Tab.1　遺構番号一覧表
Tab.2　出土遺物一覧表

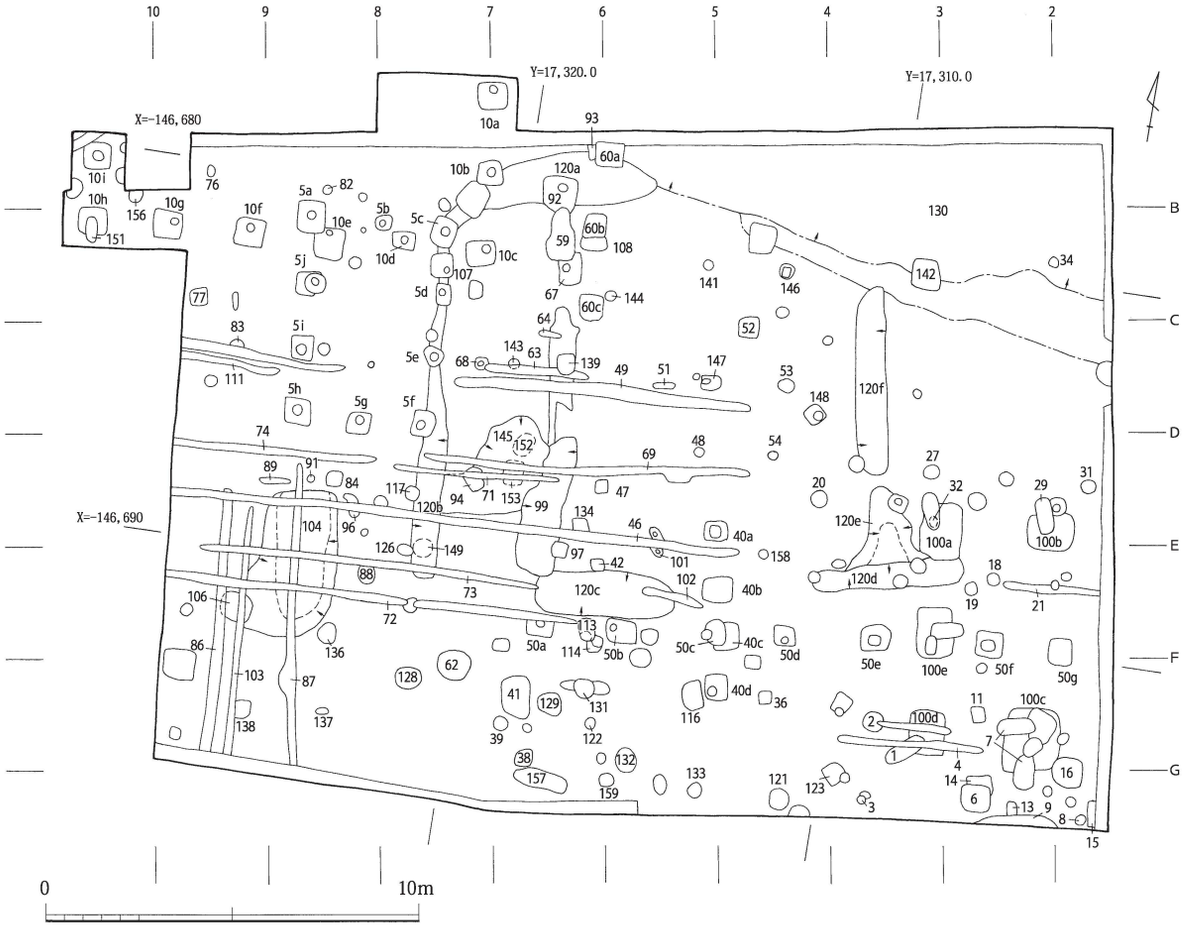


Fig.18　検出遺構略測図・遺構仮番号配置図（S=1/200）

Tab.1　遺構番号一覧表

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区
1		抜取穴	暗茶埋土 S-25の抜取穴	G3
2		P	暗茶色埋土　浅い	G3
3		P		H3
4		小溝	淡灰色土埋土	G2・3
	SB005	建物	S-161含め　S-5eは別穴　a=5f,b=5g,c=5h,d=5i,e=5g,f=5a,g=5b,h=5c,i=5d,j=161	B7～D8
6		掘立？P		H2
7		抜取穴	浅い凹状（周辺も同じ…遺物なし）S-20抜取穴	G2
8	SX008	P		H1
9		凹み	暗茶褐土	H2
	SB010	掘立建物	S-61,81,79,78,109,154,150,125,135	Cライン他
11		P		G2
12		P		G2
13		P		H2
14	SX014	P	柱痕あり　灰褐色　埋土は地山ブロック多く含む	H2
15		P		H1
16		P		G1
17	SA050g	掘立P		F1
18		P		F2
19		P		F2
20	SB100c	掘立P		F・G2
21		小溝	淡茶土	F1・2
22	SB100e	掘立P		F2
23	ST120d	区画溝	明灰茶土埋土	F3
24	SX024	P	暗茶灰	E4
25	SB100d	掘立P		G3
26		P	暗茶灰	E3
27		P		E3
28	SB100a	掘立P		E2
29		抜取穴	暗褐土　S-127の抜取穴	E2
31		P		E1
32		抜取穴	暗褐土　S-28の抜取穴	E3
33	SA050e	掘立P		F3
34		P		C2
35	SA050f	掘立P		F2
36		P		G4
37	SA050c	掘立P		F5
38		P		G6
39		P群		G6
40	SA040	柱列	a～d	E4～G5
41		土坑	埋土茶褐色	G6
42		P		F6
43	ST120e	区画溝		D3
44	ST120c	溝	黒褐色シルト	F5・6
46		素掘	褐灰色砂質	E4～F9
47		P		E6
48		P		E5
49		素掘	褐灰色砂質	D4～7
50	SA050	掘立建物	S-112,124,37,56,33,35,17	F1～G6
51		素掘	褐灰色砂質	D5
52		P		D4
53		P		D4
54		P		E4
56	SA050d	掘立P		F4
57	SA060a	P		B5
58	SA060b	P		C6
59		P		C6
	SA060	掘立建物	S-57,58,66	B5～C6
61	SB010c	掘立P		C7
62		P		G7
63		素掘	褐灰色	D6
64		素掘	褐灰色	D6
66	SA060c	掘立P		C6
67	SX067	P		C6
68		P		D7
69		素掘	褐灰色	E4～7
71		素掘	褐灰色	E6～7
72		素掘	褐灰色	F6～9
73		素掘	褐灰色	F6～9
74		素掘	褐灰色	E8～9
76		P		B9
77		P		C9
78	SB010f	P	柱根残	C9
79	SB010e	掘立P		C8

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区
81	SB010d	掘立P		C7
82		P		B8
83		P		D9
84		P		E8
86		溝	茶褐色　小石出土（径5cm）	E～G9
87		溝	茶褐色	E～H8
88		P		F8
89		素掘小溝	褐灰色	E8
91		P		E8
92		P		B6
93		P		B6
94		P		E7
96		P		E8
97		P		F6
98	ST120b	区画溝		D～F7
99	SK099	土坑	径10cm程度の石出土　遺物多数	EF6
	SB100		抜取穴あり　S-20,25,22,28,127	E1～G3
101		P		F5
102	SD102	小溝	褐灰色	F5
103		小溝	茶褐色	E～G9
104	SK104	土坑	黒褐色粘土	EF8
106		P		F9
107		P		C7
108		P		C6
109	SA010g	掘立P		C9
111		小溝	茶褐色	D9
112	SA050a	掘立P		F6
113		P		F6
114		P	下位のPit2ヶあり　080225付遺物はこの下層P	F6
116		P	柱痕あり　茶褐色	G5
117		P		E7
118	ST120d	区画溝	方形周溝墓周溝	EF3
119	ST120a	区画溝	方形周溝墓周溝	B5・6
	ST120	方形周溝墓	盛土、主体なし	B2～F6
121		P	柱痕残る　柱→明灰色土　埋土茶褐色土	H4
122		P		G6
123		P		H3
124	SA050b	掘立P		F5
125	SB010b	掘立P		B7
126	SX126	P	須恵器入り　茶褐色	F7
127	SB100b	掘立P		E1・2
128		P		G7
129		P		G6
130		流路		B1～5
131	SX131	P		G6
132		P		G5
133		P		H5
134		P		E6
135	SB010a	掘立P		A6～B7
136		P		F8
137		P		G8
138		P		G9
139		P		D6
				A
141		P		C5
142		P		C3
143		P		D6
144		P	奈良	C5
145		たまり状	かなり浅い　褐灰色土　98→145	E6・7
146		P		C4
147		P		D5
148		P		D4
149		P	98←149	F7
150	SB010h	掘立P		C10
151		抜取穴	S-150の抜取穴	C10
152		P		E6
153		P		E6
154		掘立P		B10
155	SB010i	掘立P		B10
156		P		B10
157		P		F～H6
158		P		F4
159		P		H5～6
161	SB005j	掘立P		C8

Tab.2　出土遺物一覧表

S-1

土師器(古代)	細片

S-2

土師器(古代)	椀A・細片
須恵器(古代)	甕・杯

S-3

土師器(古代)	椀・細片

S-4

土師器(古代)	細片

SB005a(掘方)

土師器(古代)	細片

SB005a(柱穴)

土師器(古代)	細片

SB005a

土師器(古代)	杯・細片
須恵器(古代)	杯

SB005c

土師器(古代)	皿・甕・片
須恵器(古代)	杯

SB005d

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

SB005e

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	杯・壷・蓋・細片

SB005f

土師器(古代)	甕・細片
須恵器(古代)	杯蓋

SB005g

土師器(古代)	細片

Sb005h

土師器(古代)	甑
須恵器(古代)	甕

SB005i

土師器(古代)	甕・皿
須恵器(古代)	細片

SB005i(柱穴)

土師器(古代)	細片

SB005j

土師器(古代)	細片

SB005j(柱穴)

土師器(古代)	細片

S-6

土師器(古代)	甕・細片
須恵器(古代)	細片

S-7

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	鉢A・甕・細片
瓦類	平瓦

SX008

土師器(古代)	皿A・細片

S-9

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

S-11

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	杯・片
その他	石

S-12

土師器(古代)	細片

S-13

土師器(古代)	細片

SX014

土師器(古代)	皿
須恵器(古代)	椀A・甕・杯蓋
金属製品	不明鉄製品

S-15

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

S-16

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

SA050g

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片
瓦類	平瓦

S-18

土師器(古代)	細片

S-19

土師器(古代)	細片

SB100c

土師器(古代)	細片

SB100c(掘方)

土師器(古代)	細片

S-21

土師器(古代)	細片

SB100e

土師器(古代)	細片

ST120d

弥生土器	細片

SX024

土師器(古代)	皿・細片
灰釉陶器	皿
黒色土器	A椀

SB100d(掘方)

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片
木製品	柱

S-26

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片
黒色土器	A椀

S-27

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

SB100a(掘方)

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片
木製品	柱

SB100b(抜き取り)

土師器(古代)	細片

S-31

土師器(古代)	細片
瓦器	細片

SB100a(抜き取り)

須恵器(古代)	杯

SA050e(掘方)

須恵器(古代)	細片

SA050e(柱穴)

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

S-34

土師器(古代)	細片

SA050f

土師器(古代)	細片

S-36

須恵器(古代)	甕

SA050c

弥生土器	細片

S-38

土師器(古代)	甕B・甕・細片
須恵器(古代)	細片

S-39

土師器(古代)	細片

SA040a

土師器(古代)	細片

S-41

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

S-42

土師器(中世)	細片

ST120e

土師器(古代)	細片

ST120c

土師器(古代)	細片
石器	サヌカイトチップ

S-46

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	椀・杯・甕
瓦類	平瓦

S-47

土師器(古代)	細片
瓦器	椀

S-48

土師器(古代)	細片

S-49

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片
瓦類	平瓦

S-51

土師器(古代)	細片

S-52

土師器(古代)	細片

S-53

土師器(古代)	細片

S-54

土師器(古代)	細片

SA050d

土師器(古代)	細片

SA060a

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	杯

SA060b

弥生土器	細片
土師器(古代)	甕
須恵器(古代)	蓋

S-59

土師器(古代)	甕・杯A
須恵器(古代)	甕・杯

SB010c

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片
木製品	柱・細片

S-62

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

S-63

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

S-64

土師器(中世)	細片
須恵器(古代)	細片

SA060c

土師器(古代)	甕・細片

SX067

土師器(中世)	製塩土器
須恵器(古代)	杯・甕・蓋

S-68

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

S-69

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	蓋・細片
瓦器	椀
瓦質土器	細片

S-71

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

S-72

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

S-73

土師器(古代)	細片

S-74

土師器(古代)	細片

S-76

土師器(古代)	細片

S-77

土師器(古代)	細片

SB010f

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片
木製品	柱

SB010e

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

SB010d

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	杯
瓦類	平瓦・丸瓦

S-82

土師器(古代)	細片

S-83

土師器(古代)	細片

S-84

土師器(古代)	皿・細片
須恵器(古代)	壷・細片

S-86

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

S-87

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片
黒色土器	A細片

S-88

土師器(古代)	細片

S-89

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

S-91

土師器(古代)	細片

S-92

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	甕・細片

S-92(柱穴)

土師器(古代)	細片

S-93

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

S-94

土師器(古代)	細片

S-96

土師器(古代)	細片

S-97

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	杯蓋・杯身・細片

ST120b

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	蓋・細片

SK099

土師器(古代)	鉢・皿A・甕A・高杯A・製塩土器
須恵器(古代)	杯A・杯B・蓋A
瓦類	瓦窯壁

S-101

土師器(古代)	細片

SD102

土師器(古代)	細片
緑釉陶器	椀

S-103

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片
瓦類	平瓦

SK104

弥生土器	壷
土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片
土製品	不明土製品

S-106

土師器(古代)	細片

S-107

土師器(古代)	細片

S-108

土師器(古代)	細片

SB010g

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	杯蓋・細片

SB010g(柱穴)

土師器(古代)	細片

S-111

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

SA050a

須恵器(古代)	杯・盤

S-113

須恵器(古代)	杯身・杯蓋

S-114

土師器(古代)	皿・細片
須恵器(古代)	細片

S-114(柱穴)

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

S-116

土師器(古代)	細片

S-117

須恵器(古代)	細片

ST120d

土師器(古代)	細片

ST120a

弥生土器	壷・甕
土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

S-121

土師器(古代)	杯A・細片
須恵器(古代)	細片

S-122

土師器(古代)	細片

S-123

土師器(古代)	細片

SA050b

土師器(古代)	細片

SA050b(掘方)

須恵器(古代)	杯

SX126

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	杯A・甕・細片

SB100b

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

S-128

土師器(古代)	甕・細片

S-129

土師器(古代)	杯A・細片
須恵器(古代)	杯蓋・甕

S-130

その他	鉄鉱石

SX131

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	壷B・杯B・杯蓋

S-132

土師器(古代)	細片

S-133

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

S-134

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片
黒色土器	A細片
瓦類	平瓦

S-136

土師器(古代)	皿・細片
須恵器(古代)	細片

S-137

土師器(古代)	細片
黒色土器	A細片
瓦類	軒平瓦・軒丸瓦

S-138

土師器(古代)	細片

S-139

須恵器(古代)	甕・壷・杯蓋
瓦類	軒平瓦
金属製品	不明鉄製品

S-141

土師器(古代)	細片

S-142

土師器(古代)	細片

S-143

土師器(古代)	細片

S-144

土師器(古代)	細片
国産陶器	甕(信楽)

S-145

弥生土器	壷
土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	杯身・杯蓋・甕

S-146

土師器(古代)	細片

S-147

土師器(古代)	細片

S-148

土師器(古代)	細片

S-149

土師器(古代)	甕・細片

SB010h(掘方)

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

SB010h(抜き取り)

土師器(古代)	片
須恵器(古代)	杯・細片

S-152

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

S-153

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片

SB010i

土師器(古代)	細片

S-156

土師器(古代)	細片

S-157

土師器(古代)	細片

S-158

土師器(古代)	細片

S-159

土師器(古代)	細片

SB005j

土師器(古代)	細片

包含層

土師器(古代)	杯A・杯B・細片
須恵器(古代)	杯A・甕・杯蓋・細片
石器	サヌカイトチップ
瓦類	平瓦

黄茶土

土師器(古代)	甕・細片
須恵器(古代)	杯・蓋・細片
瓦類	平瓦
金属製品	不明鉄製品

表土

土師器(古代)	細片
須恵器(古代)	細片
染付	椀
瓦類	軒平瓦

写 真 図 版

（凡例）
遺物写真の右下に記す番号は、
　Fig. 番号－遺物番号
と理解されたい。

PL.1

調査区全景（南から）

調査区全景（西から）